

In Search of the Image of Hemingway's Mother

ヘミングウェイの母親像を求めて

日 下 洋 右

ヘミングウェイの衝撃的な戦争体験が彼の文学に格好の素材を提供したように、彼が育った家庭や住みなれた故郷も、彼の作品のお詠え向きの材料や舞台になりえたはずである。ところが、奇妙なことであるが、家庭を扱った作品の数はきわめて少なく、故郷の町を舞台にした作品に至っては一つも見出せない。家庭も故郷も、ヘミングウェイの虚構の世界から故意に締め出されたか、無視されたかのようである。

しかも、「医師とその妻」(1924)と「兵士の故郷」(1925)の場合のように、物語は家庭を舞台にして展開されるけれども、そこに描かれている夫婦や親子の関係は異常としか思われぬ光景を現出している。「父と子」(1933)や「十人のインディアン」(1927)では父親と息子が登場するが、ここでも男同士の連帯や女のいない男たちの世界が前面に出され、母親が意図的に排除された観がある。『誰がために鐘は鳴る』(1940)でも両親のことが回想されているが、父の臆病な性格や弱腰な態度に対する不満と母の強気な性格や家長然とした態度に対する反発が表明され、再び夫婦の異常な関係が浮き彫りにされている。

このように、家庭を背景にした作品は異常に少ない上に、登場する夫婦や親子もおよそ正常とは思われぬ反発や反目をし合うことによってしか関係を結ぶことができないのである。おそらくこれは、ヘミングウェイの異常な雰囲気包まれた家庭環境に対する反発や不満が彼の心にうっ積して、彼は意図的に家庭と母親を彼の現実の世界からも文学の世界からも永遠に葬り去ろうとしたからであるとみてよい。

後年ヘミングウェイは、実生活において父親然とした態度を取ろうとした。事実、彼は30歳代からパパと自称し、他人からもそう呼ばれることをことさら好んだのである。彼の父親性の強調は、ヘミングウェイ家における夫婦間の異常な支配関係と密接に関連している。ヘミングウェイは、親の経済力の差と性格の相異とから両者の力関係が逆転している場面にしばしば出会って、母の強さの陰に隠れた父の弱さを鋭敏に感じ取っていたのである。従って、ヘミングウェイの父親であることへの固執は、父が己の弱点を克服できずに自殺してしまったことに不満を募らせ、彼が父に代って父親の地位と権威を取り戻そうとした結果とみてよい。

ヘミングウェイが父親の地位も権威も奪い取ってしまった母を葬り去ろうとしたのは、彼の反文化的な生き方へのこだわりと同一線上にある。ヘミングウェイの母の拒否と父への同化は、母の家系に生き続けている伝統への反逆と父の家系に流れている伝統への共感へと発展するのである。敷衍すれば、彼は教養や芸術といった文化の香りと都会的な雰囲気の漂う母の家系を拒否し、土と田舎の香りの漂う父の家系を受容することになったのである。従って、ヘミングウェイの虚構の世界と現実の世界に共通して認められる父親性の強調は、反文化的な生き方ともいえる自然への回帰や原始性の強調と精神的には同じ態度に根差しているとみてよい。後年ヘミングウェイが自己をパパと呼んで父親性をわざわざ誇張した背景には、母に対する反逆、拒否、そして離反と、母の家系の伝統であった文化的な雰囲気への反発が深く作用していたのである。

ヘミングウェイの作品の中で、彼の母親像が反映されていると思われる唯一の作品は、「医師と

その妻」と「兵士の故郷」である。本論では、この二編の短篇を伝記というフィルターにかけて、虚構の世界の母親像と現実世界の母親像とを対照させながら、ヘミングウェイの描く母親像とはどのようなものであったのかを考察するのが目的である。

ヘミングウェイ博士夫妻は、1898年ミシガン州北部のワルーン湖(最初はベア湖と呼ばれたが、アーネストが5歳の頃改名された)を初めて訪れたが、早速湖畔の土地を手に入れて、そこへ別荘を建てた。別荘名のウィンディミア (Windemere) は、妻グレースが祖先の故郷イギリスの有名な湖ウィンドミア (Windermere) に因んで名づけたものである。文化、教養、都会生活、そして秩序を好むグレースの父は、この別荘の土臭さになじめずに慌しく退散したといわれる。それ故、若い夫が性急にそこへ別荘を建てた背景には、ホール家が毎夏ナンタケットやコロラドへ避暑に出かけていたことへの一種の対抗意識に加え、同居中の家長然とした妻の父に対する博士の父親としての地位の復権と、ヘミングウェイ家の伝統である自然への復帰を求める意図が働いていたといえるかも知れない。別荘地での生活を確保するため、博士はミシガン州の医師免許を取得し、近辺に居住するオジブウェイ族の往診を行ったといわれる。この点は「インディアン部落」(1924)「医師とその妻」に反映されている。

「医師とその妻」は、1911年の夏ヘミングウェイが12歳の時、ヘミングウェイ家の別荘に滞在中に目撃した出来事を下地にして書かれた作品である。登場人物のうち二人のインディアンも実在の人物である。カーロス・ペイカーは『ヘミングウェイ伝』の中で、感受性が豊かで、好奇心の強い年頃であったヘミングウェイがその時経験した出来事を、次のように語っている。

The Indians that Ernest saw most often were the sawyers. Nick Boulton and Billy Tabeshaw . . . One day that summer, Dr. Hemingway summoned them to cut up beech logs for use in the stove and fire place. The logs had broken away from the boom up the lake and drifted ashore in front of the cottage. The day the Indians arrived, carrying cant hooks, axes, wedges, and a long cross-cut saw, Dr. Hemingway found his camera and followed them down to the beach to photograph them while they worked. . . Ernest hang watching, taking in every word that was said. A long time later he would write a short story about it, fictionizing the incident. . .¹

この出来事は少年時代のヘミングウェイに忘れがたい印象を残していたため、後年別荘を舞台にした短篇の素材として利用されたのである。

この短篇で興味の引かれる点は、「医師とその妻」というごく平凡なタイトルとは対照的に、医師とその妻の間には何か不穏な雰囲気漂っていることと、息子のニックが感受性と好奇心の強い年頃の少年であることである。ニックはまだ父親をダディーと呼ぶような子供ではあるが、両親の言動を第三者的な立場に立って、客観的に観察する能力を備えた年齢の少年である。そのため、彼は子供ながらも、母親の生き方、信条、そして性格に反感や不満を抱き、父親の生き方や態度を受け入れようとするのである。夫婦の関係が正常とは思えない状況にあること、ニックが結局母を拒否して父に従うことは、伝記的に見ても興味深い。これは、ヘミングウェイの幼い時から両親の間にも意見の対立やもめ事などの異様な光景がよく見られたこと、ヘミングウェイ自身が青年期以降母親と離反し、後年は断絶状態にあったことと無縁ではあるまい。

流木の丸太を切るために医者(博士)の別荘へやってきた二人のインディアンのうちの一人ニック・ボートルトン(短篇ではニックがデイクにかえられている)は、まだ済んでいない多額の妻の治療代を払

わずに済ませようという下心から医者に喧嘩を売る。ボルトンは丸太を盗んだものと決めつけるため、流木にすぎないと主張する医者との間に口論が起る。腹を立てながら別荘へ戻った医者は、争い事があったことを妻に悟られるが、その直接の原因に対する言及を避ける。医者はクリスチャン・サイエンスの信者である妻に、治療代を踏み倒すために言いがかりをつけるような人間が存在することを話しても、とても信じてもらえないことを承知しているからである。インディアンとの間にいさかひのあったことを薄々感じ取った妻は、旧約聖書の「箴言」の一節「己の心を治める者は、町を攻め取る者にまさる」を引用して、夫を諭すのである。このように、ニックの母親は、悪が存在する現実を受け入れようとしないほど理想的であり、夫に説教して、自己の信条を押しつけるほど差し出がましく、惚れの強い女性であることが分かる。ニックは子供ながらも、このような母親の性格や態度に反発し、母親を拒否して父親を受け入れるのである。そして、母親に反抗して父親と行動を共にすることは、ニックにとって社会の悪の存在と女のいない男たちの世界とに対する開眼となるのである。

医者が妻に事実を話さないのが今回だけでないことは、“Tell me, Henry. Please don't try and keep anything from me. What was the trouble about?” (p. 30) といらいらしながら事の真相を求める妻の主張に認められる。このように、妻が夫に真実を明らかにするよう要求することは、夫婦間に精神的な距離が存在していることを意味している。妻の部屋の引き降ろされたブラインドは、夫婦間の和解不能な断絶状態をみごとに暗示している。この状態は、本質的には科学と宗教という対立によって既に形成されていたとみてよい。夫は科学を信奉する医者であり、妻は信仰の力によって病気を直すクリスチャン・サイエンスの信者であるからだ。作者がこの科学と信仰という対立概念を夫婦に付与したのは、言うまでもなく十分な下地と周到な計算に基づいているのであり、偶然ではありえない。

このような虚構上の夫婦の関係から、読者はヘミングウェイ夫妻各々の生き方と子供の育て方から生じた二人の対立を想起せざるを得ないであろう。母親のグレースは一度はプロのオペラ歌手を目指した女性らしく、芸術に眼を開いてほしいという期待から、子供たちが物心のつく年頃になると、演奏、オペラ、演劇などの鑑賞や絵画に親しむことを彼らに奨励した。他方、父親のヘミングウェイ医師は、科学者らしく自然に関する知識や自然に親しむ心や野外で生活する方法、さらに自然の中で生きるために不可欠な肉体的勇氣と忍耐の初歩などを子供たちに教えた。しかし、二人の興味の対象と生き方は、融合し合う形をとらずに各々の自己主張という形をとり、二様の養育方針に反映されたため、夫婦間に溝を生じさせる結果となったのである。この自然科学と芸術の対立は、短篇の中では科学と宗教との対立に変形されて、夫婦間の断絶と反目を生みだす元凶となっているのである。

両親の衝突の狭間に立たされている息子ニックの立場は、伝記的な観点から見ても興味深い。なぜなら、伝記的にみると、この少年の立場は将来のヘミングウェイの両親に対する態度を予示させるからである。最後の場面で、木挽のインディアンとの口論とそれを妻に戒められたことに対するいらいらした気持ちを鎮めるために、森へ散策に出かけようとする夫に向かって、妻はニックに用事があるので戻るように伝言してほしいという。父親は母親の伝言をニックに伝える。ところが、ニックは“I want to go with you.” (p. 31) と言って、母親のところへ行くのではなく父親と一緒に行く方を選択する。ニックが母のもとへ戻らずに父親と行動を共にする点は、子供時代のヘミングウェイが芸術を愛し、教養を尊ぶ母親の生き方を拒否して、自然を愛するスポーツマンタイプの父親の生き方に共感したことを暗示している。母親は文学的な趣味を持ってはいなかったが、音楽は言うまでもなく、絵画でも素人ばなれた才能を発揮したといわれる。ヘミングウェイの文学が感覚鋭いのも、音楽と絵画の領域で発揮された母親のすぐれた才能を受け継いでいるためであると

いってよい。このように、ヘミングウェイは芸術へ手引きしてくれた母親の資質と、克己主義や物事を徹底的にやり通す完全無欠主義、自然に対する愛などを教えてくれた父親の資質を授けられたのである。しかし、ヘミングウェイは成長するにつれて、視覚芸術の鑑識眼や創造力にかけては、芸術的な感覚や創造的な素質を授けてくれた母親をはるかに追い抜いてしまった上に、ヘミングウェイという人間も母親が理解も容認もできない世界へ跳躍してしまい、母親のもとから永遠に離反してしまうのである。果たして、ニックと父親が出かける先は、父親の好む自然界、つまり黒リスの棲息する森である。それ故、“The boy’s later memories of his father were nearly always in outdoor settings. . .”² という後年のヘミングウェイの記憶も首肯できるのである。

確かに、母親の眼の悪い点と芸術的な素質の点を除けば、ヘミングウェイが父親の影響を強く受けたことは否定しがたい。だとすれば、両親の確執とヘミングウェイが母親を遠ざけて父親と同化する方向へ向かったこととの要因は、何であったのかに興味が引かれるであろう。ヘミングウェイ博士とグレースは1896年10月1日に結婚式を挙げて、当時妻を亡くしていたグレースの父親アーネスト・ホールの屋敷に居を構えた。しかし、1905年5月10日にグレースの父が亡くなると、彼女は父から譲られたヴィクトリア朝風の三階建の屋敷を手放す決心をした。というのも、彼女はもっと広壮で近代的な設備の整った住居がほしかったからである。特に、音楽教師として昔の夢の一部をかなえるべく、ステージ付きの住居が是非ともほしかったからである。新居はノース・ケニルワース街600番地とアイオワ通りの交差する一画に建てられた。

コントラルトの美声の持ち主であったグレースは、グランドオペラの歌手として将来を嘱望され、23歳の時に一度はマディソン・スクエア・ガーデンでプロの歌手として舞台を踏んだ輝かしい経歴を持つ人物である。残念なことに、フットライトの眩しい光に眼が耐えられず、オペラ歌手を断念して、かねてから婚約していたクラレンス・エドモンズ・ヘミングウェイと結婚することになるのである。彼女は生来派手好きであり、貴婦人のような装いをして身を飾ることに熱中した反面、教養を身につけ、創造力を伸ばすという当時の中産階級の理想に向かってひたむきに邁進した人でもある。

グレースの裕福な生活、都会的な雰囲気、そして教養や芸術などに見られる文化の香りには、脈々と流れるホール家の伝統が息づいている。グレースの父アーネスト・ホールは、開拓時代にアイオワの農場から当時の中西部の拠点であったシカゴへ出て、刃物類の卸商として成功した人である。家庭が裕福であったため、グレースは娘時代にはヨーロッパ旅行を既に二度体験していたし、毎夏ナンタケットやコロラドへ避暑にも出かけていた。ホール家は有閑階級といっておかしくないので、家庭には祖先の故郷を偲ばせるイギリス的な雰囲気に加えて、教養や芸術などの文化の香りや都会的な匂いが漂っていた。特に音楽にかけては由緒ある家柄であったため、一家そろって音楽好きであり、例えばシカゴのオペラ見物を欠かしたことがなかったといわれる。グレースも例外ではなく、娘時代には有名な声楽家の個人指導を受けるためにニューヨークへ出かけており、一度はオペラ歌手として憧れの舞台を踏むことになるのである。

しかし、グレースはお嬢様育ちのせい家事には無関心であり、使用人が必要不可欠となっていたので、その賃金は家計に大きな負担をかけていた。この経済的な問題も、子供の躾や教育と同様に二人の衝突の原因の一つとなっていた。料理人や子守女が頻繁に入れ代っていたので、新しい料理人が見つかるまでの間、ヘミングウェイ医師自らが台所仕事をやらねばならないことがあったり、往診中に自宅へ電話をかけてパイを天火から取り出す時間だと伝えたことすらあった。また、医師は買物のみならず、自宅の菜園でとれた野菜や果物の罐詰作業から裏庭で鶏や兎を飼育する仕事まで引き受けた。彼が釣りと狩猟の他に、料理の趣味を持ち合わせていたのは、皮肉にも家庭にとって幸運なことであった。このように、夫婦各々の趣味の領域やライフスタイルは著しく異なっ

ているが、この相異は二人の間の子供の躰と教育方針に関する対立や経済的地位の差となって現われることになる。

夫婦間のいざこざの要因となった子供の躰や養育については、父親の方がはるかに厳格であった。「父と子」の中でも“his father was very nervous.”³と言及されているように、彼は神経質な気質だったので、子供たちの怠慢やぐずぐずした態度が少しでも見られると、癩癩を起こして怒鳴りつけたり、いきなり殴りつけたりした。彼は勤勉な上に、誠実で、信心深く、ピューリタニズムの伝統の鑑みともいべき人物であったので、日曜日にはすべての娯楽活動を禁止し、子供たちを強制的に教会や日曜学校へ行かせた。子供たちがこのような規則に大きく違反すれば、即刻革砥で処罰され、続いて膝まづいて神の許しを乞うよう命じられたのである。

清教主義はヘミングウェイ家の伝統である。というのは、ヘミングウェイ家の祖先は、1634年マサチューセッツに移住してきた清教徒であるからだ。ヘミングウェイ博士の父であり、アーネストの祖父に当たるアンソン・タイラー・ヘミングウェイは、初期清教徒にゆかりの深いコネティカット州のプリマスに生まれ、少年時代に両親と共にシカゴへ移住した人である。アンソンは厳格で、敬虔な清教徒気質を備えた生真目な人であり、YMCA に勤めていた頃は貧困に近い生活を送ったといわれる。この祖父の清教主義の気風と切り詰めた生活体験が、アーネストの父に深い影響を与えたことは間違いない。このヘミングウェイ家の清教主義の気風とホール家の文化的な有閑階級の気風とは著しく対照的であり、この気風の差異がクラレンスとグレース夫妻の生活に微妙な影を投げかけて、両者の対立の遠因となっている可能性がある。

博士は釣りと銃猟の愛好家でもあったので、父親から子供たちへの贈り物は、母親からの贈り物が芸術への開眼であったのに対して、自然の知識と野外生活の楽しみ方であった。彼は野外での料理の仕方、斧の使い方、テントの張り方、銃弾の作り方、剥製の作り方、銃や釣竿や索具の扱い方と保存法、魚や鳥の調理法とフライパンや天火を使用した焼き方などを息子に教えたし、さらには肉体的な勇気と忍耐に関する原理、即ち克己主義を教えこんだ。

博士のピューリタニズムの継承と同様、博士の自然への愛着もヘミングウェイ家に綿々と生きていた伝統である。この伝統に最も寄与した人が、博士の母親、つまりアーネストの祖母である。彼女は南北戦争当時、女子学生がきわめて珍しい時代に、苦学しながら6年かけて大学を卒業した。結婚後貧しい生活を送りながらも、彼女は植物学や天文学の知識を、クラレンスはじめ子供たちに、やがてマーセリンやアーネストなど孫たちに授けたのである。この伝統は明らかにアーネストの父に受け継がれた。というのも、父はマーセリンやアーネストに挿絵入りの博物の本を読んでやったり、シカゴの自然博物館へ子供たちを何度も連れて行ったりした他に、ミシガン州北部に別荘を建てて、子供たちを自然に直接触れさせたからである。アーネストにも博物学的あるいは原始的な性向が見られるのは、子供時代に父親から受けた祖母譲りの自然に関する教育のお陰であろう。

躰や教育の点では、母親は父親よりもはるかに寛大であり、子供たちに人生を楽しく過ごしてほしいと願っていた。彼女は子供たちに何よりも芸術に眼を開かせて、その方面の才能を開花させ、それを可能な限り高い水準へ引き上げてやりたいと願ったのである。そのため、子供たちの物心がつくや否や、彼女は音楽やオペラや演劇などのチケットを買い与えたり、幼い頃からシカゴ美術館の絵画やデッサンに馴染み親しむことを奨めたりしたのである。

一方、母親のグレースには母系家族の女家長のように振舞うといった強い性格の一面が認められたようである。そのような性格から、彼女には子供の育て方についても自己の好みを押し通す傾向があり、しかも自己の好む育て方をかなり徹底させたようである。その有名な一例は、ヘミングウェイが幼年時代に、一歳年上の姉マーセリンと服装から髪型まで同じ格好にされて双子同様に育て

られたことである。双子同様の格好をして写っている二人の写真は、この事実を裏づけている。母親の徹底ぶりは、ヘミングウェイが1905年の小学校入学時からハイスクールの卒業時まで姉と同期であったことにも認められよう。それ故、ヘミングウェイの後年の男らしさの誇示は、幼少期に母親の個人的な好みから女の子のように育てられたことへの反発や反動の表出であったとみなして差し支えない。

子供たちの躾や養育に対する両親の方針の相異は、二人の興味の領域の違いの他に、性格の相異によっても影響を受けているとみてよい。ヘミングウェイの父の体質や人物像については、短篇「父と子」の中でかなり詳しく、正確に言及されている。これは、この短篇の中で描かれている父親像と、ベイカーの伝記の中で明らかにされている父親の実像とを対照させることによって証明される。「父と子」の中でニックが思い出す父親像は、明らかにアーネストの父クラレンス・エドモンズ・ヘミングウェイの実像である。ニックは父というと、大きな体格、広い肩、素早い動作、鷲鼻、薄い顎髭、魚釣り、銃猟のことを思い出すが、これは“*At twenty eight, Ed Hemingway stood six feet tall, with powerful arms and shoulders and a barrel chest. He wore a black beard to increase the maturity of his appearance. His Roman nose was rather hawklike and his brown eyes were phenomenally farsighted Apart from collecting, his chief avocations were fishing, hunting, and cooking.*”⁴と語られているアーネストの父親像と明らかに重なり合う。

ニックは父のことを“*His father had frost in his beard in cold weather and in hot weather he sweated very much.*”⁵と語るが、これは“*He [Ernest] remembered that his father ‘had frost in his beard in cold weather’ while ‘in hot weather he sweated very much,’ as in fact Ernest did, too.*”⁶ことを想起させる。“*He [His father] liked to work in the sun on the farm because he did not have to and he loved manual work, which Nick did not.*”⁷は、伝記中の“*He liked to work in the sun on the farm because he did not have to, and loved all forms of manual labor as Ernest in his maturity did not.*”⁸と対応する。

さらに、「父と子」の中で父のことが好きだったニックも、その体臭だけは好きになれなかったため、父のシャツのお古をもらう羽目になった時には、それを脱ぎ捨てて小川に突っこみ、その上に石をのせたままシャツなしで魚釣りから帰る。ニックがシャツをなくしたというと、父は嘘をついたと言ってニックを殴る。しかし、父親の厳格な気質と厳しい躾は、ニックの反抗心を燃えたたせるだけである。というのは、短篇の中で“*Afterwards he [Nick] had set inside the woodshed with the door open, his shotgun loaded and cooked, looking across at his father sitting on the screen porch reading the paper, and thought, ‘I can blow him to hell. I can kill him.’ Finally he felt his anger go out of him and he felt a little sick about it being the gun that his father had given him.*”⁹と語られているからである。この描写も事実といってよい。というのも、ベイカーは伝記の中で、全く同じ場面を指摘しているからである。このように、道徳観念が強くて、気短かな父のことをヘミングウェイは、“*The doctor’s ideas of right and wrong were firm and fixed. Any offenses were likely to rouse him to instantaneous indignation. His children remembered many occasions when his ‘dimpled cheeks and charming smile’ gave sudden place to the glinting eyes and tautly drawn mouth of one whose moral sensibilities have been mortally exasperated.*”¹⁰と述懐している。

ベイカーが“*Grace . . . habitually maintained an air of ladylike serenity, saving up her complaints and spending them all at once in outbursts of aggrieved rectitude.*”¹¹と語っているように、父親が癩癪を破裂させるタイプであったとすれば、母親は不満をためておいて、ある時突然それを爆発させるタイプであったといえよう。この母親の性格は、息子に遺伝したようである。

しかも、息子の方がずっと執念深く、陰湿のように思われる。というのも、ベイカーは次のような事実を指摘しているからである。時には、息子も母親と同じように傷ついた気持ちをうっ積させ、気分を害する意図が全くなかったのに彼を怒らせてしまった連中に対して生涯恨みを抱き続けた。時には、とりわけ父から不当なひどい罰を受けたような場合には、彼の方もそれに負けずにどす黒い憤怒を胸に秘めて父の怒りに対抗した。このようなヘミングウェイの性格を示す興味深い一例は、1917年の秋、セントルイスへ帰る途中にオーク・パークへ立ち寄った年上の友人ビル・スミスに打ち明けられた出来事である。ヘミングウェイが友人に語ったのは、ウインディミア荘の裏庭にある園芸用の道具を収納する納屋で起こった事件である。“It commanded a view of the path into which Dr. Hemingway sometimes stepped while working among his tomato vines. Ernest reported that when his father had punished him and he was angry, he had sometimes sat in the open door of the shed with his shotgun, drawing a bead on his father’s head.”¹²

クルト・ジンガーは『ヘミングウェイ——巨人の生と死』の中で、母親や両親の対立のことをヘミングウェイの口から直接語らせているが、要約すれば次のようである。「少年時代や両親のことについては、まだあまり書いていないが、歳をとってくると、それだけ母のことがよく理解できる。一緒に暮らすにしては、自分はあまり扱いよい息子ではなかったことを今では自ら認めざるを得ない。家族は銘々勝手な生き方をしている。1928年に一度集まっただけで、それ以来一緒に顔を合わせたことがない。父が自殺したので、後に残された問題をずいぶん長い間あれこれ考えてきた。父が敢然と母に立ち向かうか、別れて別の女性と結婚していたならば、人生はどんなふうになっていたのだろうかなどと思ったりした。今になってみれば、そのようなことはどうでもよい問題であり、審判すべき問題ではない。そのまま受け取って理解するようにしなければならない。理解することは許すことである。」このヘミングウェイの述懐の中で特に注目される点は、「父が敢然と母に立ち向かうか、別れて別の女性と結婚していたならば……」である。この表現は、言い換えれば両親の支配関係を言い表したものである。母親がヘミングウェイ家の実権を握っていた背景には、既に言及された女家長然とした態度と、自己の教育方針を徹底的に押し通す意志に認められる彼女の強気な性格とが作用していたとみてよい。ジンガーも、自分で自分の伝記が出るのを請け合っているほどの非常に強い性格であったと指摘して、このような母親の性格を裏づけている。

逆説的に言えば、母が強気な人物であったことは、父が余りに臆病な人物であったことを証明していよう。事実、ヘミングウェイは父の自殺もこの性質が災いしたとみており、母に対して弱腰な父への不満を募らせている。『誰がために鐘は鳴る』の中で、ジョーダンが父が自殺した時の衝撃を“I’ll never forget how sick it made me the first time I knew he was a *cobarde*.”¹³と苦々しく回顧しているが、これは臆病な性格だった父に対する作者の不満の表明とみてよい。

この不満は、消極的であるが「医師とその妻」に既に認められる。というのも、作者はこの作品が母親に頭が上がらない父親の臆病な性格に気づいた時のことを描いたものだとして述べているからである。¹⁴ヘミングウェイは父に共感しながらも、母の尻に敷かれた父を歯がゆい思いで見ているのである。子供心に強い母に敢然と立ち向かって両者の支配関係を逆転するか、母と決然と別れるかして、男の意地を見せてほしいと父に期待したであろう。それが期待はずれに終わったために、後年仮定法を用いた回顧の形で、ヘミングウェイのやり切れない思いがジンガーに向かって吐露されたのであり、同じ真情は『誰がために鐘は鳴る』のジョーダンによっても、“He was put a coward and that was the worst luck any man could have. Because if he wasn’t a coward he would have stood up to that woman and not let her bully him. I wonder what I would have been like if he had married a different woman?”¹⁵と回想されるのである。

母グレースが家庭の支配権を握っていた事実は、二人が結婚当初彼女の父の家に同居した時点で

既に明日であったとみてよい。身近かな例では、アーネスト・ミラー・ヘミングウェイという名前の由来自体からも、両親の力関係をうかがい知ることができる。というのも、アーネストはグレースの父に当たるアーネスト・ホールから、洗礼名のミラーは母の兄の名から各々採られているといわれているからである。それ以上に注目すべき事実は、ヘミングウェイ家では母親が財政上の実権を握っていたことである。妻の実家に同居する形をとったこと自体、若い夫の経済的な事情が大きな理由であったといわれている。というのも、ヘミングウェイ医師は結婚当初見習い医師から独立したばかりであったため、収入がきわめて少なく、月50ドルということすらあったといわれているからである。

他方、妻のグレースは多数のピアノや声楽の内弟子を抱え、収入が月約千ドルに達したこともあったといわれる。後年も二人の収入に差がある状況は変わらず、妻が音楽の教授によって得る収入は、夫が医業で得る収入よりも上回り、1908年に博士がニューヨークで受講した産科研修の一切の費用は、彼女の収入の一部によって賄われたのである。このように、主たる理由として夫の経済的な事情と、副次的な理由として妻の音楽のレッスン用に広い部屋が必要だったことが、妻の実家に同居することになった主要な理由であったとみられる。従って、若い医師が妻の父の屋敷に厄介になって、肩身の狭い思いをしていたことから、当時の夫には妻と義理の父に対して屈折した心理が働き、その点も後の夫婦間の対立や反目の遠因として微妙な影を落としたのではないかと想像される。

両親の勢力関係が二人の間の不仲や衝突を生み出す要因となり、子供たちの躾や養育をはじめとする家庭内のもめ事の種となったであろうことは想像にかたくない。このような家庭の事情は、思春期のヘミングウェイの精神に多大な影響と動揺を与えないわけにはゆかなかったはずである。それ故、ヘミングウェイが二度までも家を離れて、家庭内のごたごたを避けたり、その元凶である両親、特に母親に対して反抗心を募らせたりしたのも無理からぬことであろう。当時の家庭内の状況は、別荘近辺に居住していたインディアンたちから受けた印象と同様、思春期のヘミングウェイの脳裏に強烈な印象を焼きつけたはずである。従って、当時のヘミングウェイ家の家庭状況が、後年の彼の作品に影響を与えぬはずはなかったとみてよい。事実、この状況が間接的に描写されている作品が他ならぬ「医師とその妻」であり、「兵士の故郷」であるが、前者では夫婦の不仲が、後者では母親と息子の対立が映し出されているのである。「医師とその妻」は、ヘミングウェイの少年時代の家庭環境を点描した最初の作品であり、またその後のヘミングウェイ自身の両親、特に母親に対する態度を予示させる最初の作品ということになる。両親の確執と不和から生じたと思われる父親を受け入れて、母親を憎悪し拒否したヘミングウェイの姿勢は、意識しようとしまいと青年期以降の彼の女性観に重大な影響を与え、そしてその女性観が作品中の女性や男女関係に何らかの形で反映されている点を忘れてはならないであろう。

一般的に言えば、子供時代に異性として最も興味を引かれるのは母親であるので、ヘミングウェイが母親を嫌悪し、拒否するのは異常な心理状態というべきであり、その屈折した精神状況が男女の登場する作品の女性観や男女関係に投影されているとみるべきである。『武器よさらば』のキャサリン、『誰がために鐘は鳴る』のマリア、『河を渡って木立の中へ』のレナータなどに代表されるように、ヘミングウェイが好んで描く女性は、紋切型の自己犠牲的な女性であると断じられているが、この点はそれほど簡単に片づけられる問題でない要素を含んでいる。というのも、既に明らかにされたように、この女性像は伝記的に見ればきわめて複雑な事情が絡み合っただけで生まれたものであることが分かるからである。母に頭が上からない臆病な性格の父と男勝りな性格の母という図式や家庭における二人の支配関係がヘミングウェイの脳裏にこびりついており、この異常な関係は本来逆転されるべきだという想いが子供の頃から彼の心の中にわだかまっていたはずである。この感情は、

既に触れたように、ヘミングウェイがジンガーとジョーダンの口から「父が敢然と母に立ち向かうか、別れて別の女性と結婚していたならば、人生はどんなふうになっていたのだろうかなどと思ったりした」と語らせていることから裏づけられるからである。夫婦の異常な力関係に対するヘミングウェイのこだわりが、母親への反発となって表われ、それが作品の中では男性が優位に立ち、女性に自己犠牲を促す形に転化し、作品によってはその図式が極端な形を呈したと考えるべきであろう。それ故、主要な作品の中で描かれている利他的女性こそ、ヘミングウェイが子供の頃から求めていた正常なそして理想的な女性像であり、母親像であったといてよい。逆説的にいえば、ヘミングウェイの母親が利他的女性でなかったが故に、彼は母に反発し、永遠に離反することになったといえよう。

「兵士の故郷」の主人公ハロルド・クレプスの精神状況は、第一次大戦から帰還した兵士たちが早晩陥る虚無と倦怠に支配された状況を端的に表している。クレプスの復員時期が遅すぎたため、住民の熱烈な歓迎ぶりも下火になり、彼の体験談に対する住民の反応も薄らぐと、彼は故意に作り話を捏ち上げて人々の関心を引こうとする。彼の涙ぐましい努力は、一日も早く社会復帰し、周りの人々や環境に適応しようとする試みに他ならないのだが、他方ではそのような努力も戦争で生命をかけて戦った体験も、すべて無価値で、空しいもののように思われるのである。

クレプスとヘミングウェイとは、復員時期も従って社会から受けた反応も全く異なっていたにもかかわらず、結局クレプスの置かれた状況がヘミングウェイの復員後に直面した生活や心境を反映していると思われる点は注目すべきであろう。クレプスとは違って、ヘミングウェイ自身は終戦から2か月後に帰還したため、歓迎熱はまだ高く、“The minute he limped down the gang-prank of the *Giuseppe Verdi* on January 21st, he found that he was a celebrity—the one man among all the uniformed passengers to be singled out by a reporter from the *New York Sun* ... The reporter believed that the 227 scars on Ernest’s legs proved that he had taken more punishment than ‘any other man, in or out of uniform,’ who had ‘defied the shrapnel of the Central Powers.’ He also got the impression that Ernest had spent much of October and early November fighting in the vicinity of Monte Grappa. . .”¹⁶ と、彼の記者会見が誇張に満ちていたことでも明らかなように、彼がどれほど英雄視され、熱烈な歓迎を受けたかが分かるであろう。

特に、『オーク・パーク』紙の婦人記者ロゼル・ディーンインタビュー記事が出て以来、ヘミングウェイのもとへ戦争体験談を語ってほしいという講演依頼が多数舞いこんだ。この種の講演の中で最も成功を収めたのが、1919年3月14日に母校のオーク・パークハイスクールで行われた講演会であった。その際には、彼はオーストリア軍の鉄兜、拳銃、照命弾用ピストルなどの他に、負傷した夜に着用していた血染の半ズボンまで持参して見せ、生徒たちに深い感銘を与えたといわれる。

帰環時にすっかり歓迎熱が冷めていたクレプスの場合とは一見異なった状況からヘミングウェイは出発したのだが、結果的にはクレプスと同じ道を辿ることになる。なるほど、クレプスとヘミングウェイに対する帰環当時の歓迎ぶりは明らかに異なっていたので、当然その後の二人の状況も異なるかに思われる。しかし、皮肉なことに、二人の辿る道は異なることがなかったのである。というのも、住民の関心を引こうとする積極的な姿勢から虚無と倦怠に陥った消極的な姿勢へと変化するクレプスの心境の落差は、そのままヘミングウェイにも当てはまるからである。

帰環兵を歓迎することに興味を失った人々の関心を取り戻そうと、作り話と誇張で塗りかためられた戦争体験談を語ることによって、クレプスがかえって貴重な戦争体験を全く無価値なものにしてしまった上に、かけがえのない青春までも無駄にしてしまったと悟ることになる。その結果、彼は空虚な気持ちに包まれたまま自己の殻に閉じこもってしまうのである。“In this way he lost everything.” (p. 91) というクレプスの簡潔な述懐には、このような虚無の固い殻をかぶった複雑

な心境が凝縮されているのである。他方、ヘミングウェイの帰環風景が一見華やかに見えた裏には、クレプスと共通の精神状況が潜んでいたのである。例えば、ロゼル・ディーン記者の語ったところによれば、彼女がインタビューのためヘミングウェイを口車に乗せて『オーク・パーク』紙の新聞社の事務室へ連れこんだところ、彼は自己の戦争体験を語りたがらなかったばかりか、英雄と呼ばれることも非常に嫌がっていたということである。また、ヘミングウェイの姉のマーセリーンは週末に帰省する度に、“He was lonely indeed. . . she thought he resembled someone ‘put in a box with the cover nailed down.’”¹⁷と語っている。

唯一その孤独な生活と心境の慰めとなっていたのは、彼の恋人であるアメリカ人赤十字看護婦アグネス・フォン・クロウスキーとの文通であり、シカゴとその近辺出身のイタリア系アメリカ人が祖国イタリアのために戦って負傷した友人をたたえて開催したパーティであったが、やがてアグネスとの恋もはかなく破れ、パーティも幾度となく続けば父親の不興を買うことになるだけであった。故郷に錦を飾った凱戦兵士たちの上擦った生活の陰に隠れて、彼は生まれ故郷にいるにもかかわらず、両親や住民に対して違和感を覚えて、まるで異邦人のような意識を募らせていたのであり、その点ではヘミングウェイのこの状況は、そっくりそのままクレプスのものであったといえよう。

ヘミングウェイが家族や故郷になじめなかった要因は、戦争によって精神的にも肉体的にも破滅的な衝撃を受けて虚脱感に襲われた人間を戸惑わせた旧来の因襲やお上品な伝統に縛られた家庭や社会環境にあったと思われる。「兵士の故郷」で描かれたクレプスの家庭環境も、作者が帰環後間もなく直面して戸惑った自己の家庭そのものを映し出しているといえよう。事実、帰環後のクレプスの虚脱感は、彼の家庭環境によって助長されたものだといってよい。現実社会の悪の存在を認めようとしないうの広さに欠けていた「医師とその妻」のニックの母親のように、クレプスの母親も、彼が戦場で嘗めた衝撃的な体験によって受けた精神的な打撃を理解しようとする努力と寛容さに欠けている。母親は息子が戦場へ赴く前の“exactly the same height and style collar”(p. 89)に象徴されている旧来の規範や価値観や倫理観に支配されたままである。また、戦争によって従来の価値観も倫理観も、失墜するか変質したにもかかわらず、地域社会も旧態依然とした因襲に支配され、既成の価値基準や倫理構造に縛られたままである。作者はこの状況を“Nothing was changed in the town except that the young girls had grown up.”(p. 92)とアイロニカルに表現しているのである。

若い女性たちも肉体的には成長したが、精神的にはこのような形骸化した社会に安住し、そこから抜け出すこともそれを乗り越えることもできないのである。従って、若い女性たちに対するクレプスの態度も、きわめて傍観者的で、懐疑的にならざるをえないのである。“Vaguely he wanted a girl but he did not want to have to work to get her. He would have liked to have a girl but he did not want to have to spend a long time getting her. He did not want to get into the intrigue and the politics.”(pp. 92-93) クレプスの異性に対する男性的機能は、『日はまた昇る』のジェイク・バーンズの肉体的不能に対して、精神的不能というべき症状を呈している。戦後のジャズ・エイジあるいはモダニズムの時代にふさわしく、流行の先端に行く服装に身を抱み、さっそうと闊歩しながらも、依然として戦前の複雑な因襲の支配する世界に住んでいる若い女性たちは、全く次元の違う世界に住んでいる彼からみれば、異質な人間としか映らないのである。それが、彼に異性との関係をますます煩わしく思わせ、異性に対してますます彼に消極的な態度を取らせるのである。

戦争の余波と戦前と体質の変らない家庭や社会によって幻滅感に取りつかれた息子を理解しようとも、労ろうともしない母親は、既成社会の典型的な人物チャーリー・シモンズを例に挙げて、息子が一日も早く社会復帰し、仕事を見つけ、結婚して身をかため、社会の誉れとなるようにと彼に繰り返して説諭する。しかし、息子は戦争によって魂が揺さぶられるほどの打撃を受けた上に、精神的

な支えとなっていたあらゆる価値基準も倫理体系も根底から崩されて混乱し、何も手につかない状態にある。そのため、新しい価値基準や精神的支えを暗中模索するだけで容易に見つけ出せず、周囲の偽善的な世界となかなか妥協できずにいるのである。しかし、母親には毎日を無為に過ごさざるをえない息子の苦しい心中を思いやって、力になろうとする誠意も真心もないのである。クレプスの母は一見息子に対して寛容であり、何くれとなく世話をやき、戦争体験に耳を傾けようとさえするように見える。しかし、この態度は彼の歡心を買おうとする彼女の単なるジェスチュアにすぎず、実は自己の世界観を息子に強制しようとする方便の一つにすぎない。母親には息子の価値観や世界観を変質させるほど強烈な衝撃を与えた戦争体験を自己の体験として同化しようとする努力も、このような辛酸を嘗めた相手に対する同情や共感から親と子の精神的な融合をはかって、彼の心の支えになろうと心を砕くこともない。ペイカーが洞察しているように、母親には感傷的な手段に訴えて、自己の世界を息子に利己的に押しつけようとする傾向が強い。¹⁸

自己の宗教や信条に支配された利己的な世界を息子に強制するクレプスの母親の原型は、「医師とその妻」のニックの母親に見出すことができる。換言すれば、クリスチャン・サイエンティストであるニックの母親の姿は、そのままクレプスの母親に受け継がれているのである。この傾向の母親に対する子供の共通した反応は、反発や反抗などの敵対感情を抱くことである。この反応は二つの短篇の中に明らかに認められる。「医師とその妻」のニックは、母親に対して消極的な反発を示す。フィリップ・ヤングが指摘しているように、彼がこのような不満な態度を取るのは、次のような理由のためである。“... he [Nick] is completely dissatisfied with his mother. ... Nick is still a small boy, apparently. . . but even so it is clear that he cannot stomach his mother's naïve refusal to face facts.”¹⁹ニックはまだ子供であるがため、悪の存在の事実を認めようとしぬ母親に対して公然と反抗の拳に出ることはない。ニックの母親に対する反発は、彼が用事があると呼ばれたにもかかわらず、父に付いて森へ行く方を選ぶことによって具体的に示されるのである。

他方、クレプスはこの反抗心を煽らせたニックの成長した姿に他ならないが、彼はもはや子供ではないがために、母親に面と向かって口答えし、露骨に反発するのである。例えば、クレプスが身の振り方を決めただどうか母親に尋ねられて、まだ考えていなかったと答える場面では、二人の間に次のようなやりとりが交わされる。

“God has some work for everyone to do,” his mother said. “There can be no idle hands in His Kingdom.”

“I’m not in His Kingdom,” Krebs said.

“We are all of us in His Kingdom.”

Krebs felt embarrassed and resentful as always. (p. 98)

この対話から想起される興味深い点は、ニックやクレプスの母親像が結局は第一組合教会の有力な教会員であったヘミングウェイの母親から生まれていることである。というのも、こうしたクレプスの母親の主張には、ヘミングウェイの復員後の放浪生活に対する母親の忠告の手紙の趣旨がよく反映されているからである。特に母の愛を銀行預金に喩えていることを別にすれば、神やイエス・キリストを持ち出して息子を説得している場面に、クレプスの母親の説教との類似点が認められるからである。

Unless you, my son Ernest, come to yourself; cease you lady loafing and pleasure seeking; borrowing with no thought of returning stop trying to graft a living off anybody and

everybody; spending all your earnings lavishly and wastefully on luxuries for yourself; stop trading on your handsome [sic] face to fool little gullable [sic] girls, and neglecting your duties to God and your Savior, Jesus Christ: unless, in other words, you come into your manhood, there is nothing before you but bankruptcy— you have overdrawn . . . When you have changed your ideas and aims in life, you will find your mother waiting to welcome you. Whether it be this world or the next— loving you and longing for your love. The Good Lord watch between me and thee, while we are absent one from the other.

Your still hoping and praying mother,
Grace Hall Hemingway²⁰

ヘミングウェイの母親の手紙に流れている倫理観が、クレップスの母親の説教の中心をなす倫理観と相通していることは明白である。おそらくこれは、クレップスと母親との葛藤が、復員後のヘミングウェイと母親との軌轢を下地にして描かれたからであろう。21歳になったばかりのヘミングウェイにとって、この母親の手紙は家からの永久追放を意味したので、母親はこれまで以上に息子の反発を招き、これ以後両者の溝は深まり、修復不能な状態へ発展してしまうのである。

魂を揺さぶられるほどの衝撃的な戦争を体験して、宗教に不信感を募らせ、祈ることすらできなくなったクレップスの心の奥深く食いこんだ底知れぬ虚無と倦怠の世界では、母親の説く神の国が入りこむ余地は全くない。その世界は既成の権威も価値も一切否定するので、そこに住むクレップスが制度化した宗教の権威も、それに根差した母親の愛をも拒絶するような否定的な態度を取るのには理の当然であろう。戦争を体験する以前のクレップスならば、両親が安住しているキリスト教的モラルを基盤とする世界に共感し、満足していられたであろうが、現在の彼にはそのような世界は精神的な支柱として何ら期待も信頼もできないのである。宗教は戦争に直面して無力を露呈して全く信頼を失い、従って彼には宗教に基づく人間愛すら信じられなくなったのである。

“. . . Don't you love your mother, dear boy?"

"No," Krebs said.

His mother looked at him across the table. Her eyes were shiny. She started crying.

"I don't love anybody." Krebs said. (pp. 99-100)

". . . I'll try and be a good boy for you."

"Would you kneel and pray with me, Harold?" his mother asked.

They knelt down beside the dining-room table and Krebs's mother prayed.

"Now, you pray, Harold," she said.

"I can't," Krebs said.

"Try, Harold."

"I can't."

"Do you want me to pray for you?"

"Yes." (pp. 100-101)

クレップスと母親との会話の中には、復員後の生活に適応できずに虚無の殻に閉じこもり、厭世観に取りつかれて苦悩しているクレップスの悲惨な精神状況が端的に示されている。また、戦争によって戦前の価値基準や宗教観が崩壊して、それらが信頼できなくなったクレップスに、戦前の宗

教観やそれに根差した愛や信念にしがみついて、それらを息子に押しつけようとする母親の姿が浮き彫りされている。

母親が自己の信奉するキリスト教的倫理観に基づいた親の愛を、戦争によって母親の信じる宗教も倫理観も喪失してしまった息子に押しつける結果、両者の間には軌轢が生じる。しかし、母親や母親の安住している世界に背を向けずにいられないクレップスも、母親の心を傷つけ涙に暮れさせてしまったことに後ろめたさを感じ、妥協の道を探ろうと努力する。彼が見出した解決策は、“I didn't mean I didn't love you.”(p. 100) と嘘をつくことである。しかし、彼の心にもない嘘に機嫌を直した母親が、親の愛情の深さを強調することに彼は吐気を催すのである。この結果、結局彼は母親を理解することも受け入れることもできないのである。

クレップスは精神的には、『武器よさらば』で戦争を体験したフレデリック・ヘンリーの復員後の姿を予示させる。クレップスが神に祈ることができない点は、復員前のフレデリックの姿勢に既に認められるからである。クレップスはフレデリックの延長線上にある人物とすれば、戦場にいる最中に既に既成の宗教に対する信頼を喪失していたことになる。フレデリックは親しい牧師に対して人格的には敬意を抱いているが、祈るよう勧めることには受け入れがたい態度をとる。彼は絶えず祈ることを勧める牧師の教えに従わず、むしろ快楽を得るよう勧める親友の忠告を受け入れる。例えば、フレデリックは休暇を敬虔な人々の住む牧師の出身地アブルツィイで過ごすよう牧師から勧められるが、そこは祈りを拒否する人間が喜んで行く所ではないので、牧師の出身地への招待を辞退し、親友の意見を容れてローマ方面へ出かけて快楽を得てくるのである。

既に述べたように、クレップスと母親との反目には、オーク・パークへ帰還後のヘミングウェイと母親との対立が色濃く反映されているとみてよい。ヘミングウェイが戦地から帰還する時に懸念した点は、礼儀正しい態度、教養ぶった上品そうな話し方と無味乾燥な内容の話、気取った笑い、お茶の会、園遊会など思い出しただけでも息の詰まりそうなお上品な伝統に支配された故郷オーク・パークへ帰らなければならぬことである。それ以上に不安を憶えたのは、母親との間にどうしても越えられない精神的そして感情的な溝が横たわっていることである。母には息子というものが分からなくなっているのも、復員後は議論や口論が行われるであろうし、涙を流すこともあるだろう、とヘミングウェイは前途を憂慮するが、案の定その予感はその中する。母親は医学の道に進むか実務の仕事に就いて、母親の引いたレールの上を当時の中産階級の基準や倫理観に従って歩むよう息子にひたすら説いていた。しかし、息子は医者になる気持ちなど全くなく、独自の人生の道を自分なりに進まなければならないと堅く信じていたので、当然二人の間にいきかいが絶えず、その結果深いギャップが生じてしまったのである。ジンガーは、このような親子の愛情のきずな断絶、母親の一方的な教育方針や差し出がましい態度に対する息子の反感、それに過去のお上品な伝統に囚われた倫理観や因襲に対する息子の反発など親子の絶縁状態を要約している。「ヘミングウェイと母親との関係は、深く切れた傷口だった。彼は二重に苦痛を覚えた。彼は母と子の間に当然あるはずの情念をかきたてることができずに罪悪感を抱いたからだ。母はよく気のつく人なので、息子のことを始終気にかけて、息子に大きな望みを抱いていた。しかし、息子は母の目にはまるで見知らぬ人として映っているのを知っていた。彼は母が感じる苦痛も知っていたのだが、自分からその母に手を差し伸べることができなかった。この罪の重荷に加え、母が予め自分のために印をつけておいてくれた体裁のよい立派な道をそのまま辿って行く気になれないことを十分知っていた。彼が選んだ人生は、反因襲的で俗っぽく、興奮を絶えず誘うようなものだった。中産階級の倫理観や作法といった折目正しい上着は、彼のものではなかったということである。」

クレップスの場合と同様、帰環直後ヘミングウェイが一日のうちで最も嫌な時間は朝食事であった。母親と顔を合わせて、小言や説教を言われ、気分を悪くされる羽目に陥るからである。ジンガー

は、朝食時のクレプスと母親との気まずい対話を彷彿させるヘミングウェイと母親との間で交わされた朝食時の不毛な会話を再現している。「最も嫌なのが母と一緒に坐る朝食時であった。……朝食となると、訓戒、警告、いろいろな質問、口に出さないがむっとした憤り、そんなものがいっぱいあるのだ。ええ、そうです。彼はぶらぶら遊んでいけないことを知っていた。ええ、そうです。彼は職に就かなければならないのです。ええ、そうです。くだらない暇つぶしをいつまでもしてはいけないのです。ええ、そうです。作家は危険な職業だった。ええ、そうです。……ええ、そうです。ええ……。」

ヘミングウェイは居心地のよくない母のもとやオーク・パークの町から脱出して、ミシガン州北部のヘミングウェイ家の別荘やペトウスキーやホートン・ベイなどで、赤十字急救車隊の運転手仲間であるテッド・ブラムバックなどと一緒に放浪同然の生活を送る。その後クレプスがキャンザス・シティへ行って仕事に就こうと決心するように、彼も父の親友ラルフ・コナブルの紹介により、日曜週間誌『トロント・スター・ウィークリー』の特別読物記者として社会復帰をはかるのである。このように、「兵士の故郷」は生死に関わる危険な戦争と平穏無事な日常生活との落差によって引き起こされた虚無と倦怠に取りつかれた精神状況、お上品な伝統に支配された家庭や故郷の町的環境、母親と息子との対立などヘミングウェイの帰還後の状況が如実に反映されているとみてよい。

帰環兵クレプスが見出した家庭も故郷も、もはや戦争に疲れ、傷つき、虚無に取りつかれた人間を温かく迎え入れていやしてくれる休息の場所ではなく、そうした人間を締め出してしまう家庭や社会の縮図ともいうべき場所に他ならない。自己を偽ってまで、そのような家庭や地域と安易に妥協することも順応することもできないクレプスは、家庭も故郷も捨てて、自己の信じる道を自分なりに生きる他はないのである。神も親の愛をも拒絶したクレプスが、最後にキャンザス・シティへ職を求めて旅立とうとする決意は、彼を取り巻く社会のあらゆる価値体系から自己を切り離し、拘束的な伝統のきずなを主体的に断ち切ることによって、独自の価値体系を見つけ出し、魂の憩いの場と心の故郷を発見しようというクレプスの断固たる意志表示である。もし、クレプスをニックあるいはヘミングウェイ自身の生涯の中で理解するとすれば、兵士の家庭あるいは故郷やキャンザス・シティは、深遠な象徴的意味を帯びてくるのであり、彼ら主人公たちの本当の意味での魂の遍歴は、この時点において始まったというべきであろう。

ヘミングウェイは古臭いお上品な伝統とピューリタニズムに支配された家庭や故郷を嫌悪し拒否したために、家庭や故郷と離反し、それらと彼との間に永遠に乗り越えられぬ溝が形成されてしまったのである。さらに、平穏な日常生活よりも過激な行動や冒険に真理を見出したヘミングウェイの実存主義的行動様式が、旧来の伝統に安住している平穏無事な家庭や故郷と訣別することに拍車をかけたとみてよい。その結果、母親、家庭、そして故郷は、彼の心の世界からも虚構の世界からも永遠に葬り去られたのである。唯一書き残された作品「医師とその妻」と「兵士の故郷」も、母親や家庭や故郷の救済でも、和解でもなく、それらに対する不満、憎悪、そして拒絶の表出であったのである。

注

本文の()内の引用ページ数は、Ernest Hemingway, *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958) による。

1 Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), pp.13-14.

2 Baker, *A Life Story*, p. 9.

3 Ernest Hemingway, *Winner Take Nothing* (New York: Charles Scribner's Sons, 1961), p. 228.

- 4 Baker, *A Life Story*, p. 2.
- 5 Hemingway, *Winner Take Nothing*, p. 239.
- 6 Baker, *A Life Story*, p. 9.
- 7 Hemingway, *Winner Take Nothing*, p. 239.
- 8 Baker, *A Life Story*, p. 9.
- 9 Hemingway, *Winner Take Nothing*, pp. 239-240.
- 10 Baker, *A Life Story*, p. 31.
- 11 Baker, *A Life Story*, p. 31.
- 12 Baker, *A Life Story*, p. 31.
- 13 Ernest Hemingway, *For Whom The Bell Tolls* (New York:Charles Scribner's Sons, 1968), p. 338.
- 14 Philip Young, *Ernest Hemingway:A Reconsideration* (Pennsylvania State U.P., 1966), p. 33 脚注参照.
- 15 Hemingway, *For Whom The Bell Tolls*, p. 339.
- 16 Baker, *A Life Story*, p. 56.
- 17 Baker, *A Life Story*, p. 57.
- 18 Carlos Baker, *Ernest Hemingway:The Writer As Artist* (New Jersey:Princeton U.P., 1963), p. 130.
- 19 Young, *Ernest Hemingway*, p. 33.
- 20 Baker, *A Life Story*, p. 72.

テキスト

- Hemingway, Ernest. *In Our Time*. New York:Charles Scribner's Sons, 1958.
 —————. *Winner Take Nothing*. New York:Charles Scribner's Sons, 1961.
 —————. *For Whom The Bell Tolls*. New York:Charles Scribner's Sons, 1968.

参考文献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway:The Writer As Artist*. New Jersey:Princeton U.P., 1963.
 Baker, Carlos. *Ernest Hemingway:A Life Story*. New York:Charles Scribner's Sons, 1969.
 Singer, Kurt. *Hemingway: Life and Death of a Giant*. London:World Distributors, 1961.
 Young, Philip. *Ernest Hemingway:A Reconsideration*. Pennsylvania State U.P., 1966.